

学校の怪談

製作第二話

闇より囁くもの

第四稿

小中千昭

93-12-02

本稿は、日常をリアルに描く（＝怪異をより怖く描く）方法の一つとして、ダイアローグを 柔らかい関西喋り と設定し、記述する試みをしています。不具合、不適合なダイアローグは、現場に於いて演出家と各演技担当者の判断にて、適宜変更して下さい。本稿での表記はガイドと捉えて下さい。

暫定的地理設定は明確にしていますが、もし必要であるなら、宝塚一帯のイントネーションと設定されても良いかもしれません。

登場人物

高嶺 紀美子 (17) …………… 桜麗女子学院高二年／おっとりした性格／やや金属的な特徴ある声の持主

伊藤 美保 (17) …………… 同高二年／スキー部員／紀美子の親友／ボーイッシュユではない。

井上 昌美 (25) …………… 桜麗OG／現・スキー部コーチ

茅場 時子 (28) …………… 同／現・ブティック経営

三上 洋子 (28) …………… 同／現・主婦

林 千尋 (28) …………… 同／現・グラフィック・デザイナー

牧野 泰清 (34) …………… 桜麗高・国語科教諭

生徒 A (17) …………… スキー部員

高嶺 尚美 (41) …………… 紀美子の母

佐々木 萌 (19) …………… 佐々木愛の妹。姉に酷似しているが、活発な性格

甘味屋のオバちゃん

佐々木 愛 (17／当時) …………… 死んだ里佳と最も仲良かった生徒／コーラス部

溝口 里佳 (17／当時) …………… 「顔は見せない」

ストーリー・テラー〔教師〕

教室／放課後

生徒達は皆帰り、担任教師らしき男が教壇で何かをいじっている。古い鉱石ラジオである。

イヤホンを耳に入れ聞き入っていたが――

教師「わたしら位までですかね。ガキの頃に、ゲルマニウム・ラジオなんて作って遊んだんは。電池も入れんと何で音がするのかが、ごっつ不思議でした。まあ、大抵はザーツてな雑音ばかりで、すぐに飽きてしもたんですが……。けど、ラジオとかテレビの雑音でありますやん。あれって時々、人の声が混じって聞こえてくるの、知ってはりますか？あれ、何でしょうな。二十年位前、コンスタンチン・ローディブいうおっさんが、霊界通信機ゆづのを作ったちゆう話があります。靈魂の音がテープレコーダー通して聞こえる仕掛けになつとったそうですが――ほんまやっただかいな……」

再びイヤホンを耳に入れる――。

講堂教室／放課後

小さな耳に差し込まれたイヤホン。

冬の陽光が差し込んでいる、古い講堂教室。

独り居る、紀美子。

教室の真ん中辺り。机に座り、足をブラブラしながらヘッドフォン・ステレオを聴き、それに合わせて小声でアリアを歌っている。やや金属的な、特徴ある声。そのリヴァーブが、高い天井まで届く。

グラウンド

スキー部の陸トレが行われている。

ピッ！ 笛と共に走り出す美保。

走っていない部員達「オウレイ、ファイ！ ファイ！ ファイ！」

美保の顔を、汗が滴り落ちる。

講堂教室

音楽に耳を傾けながら、所在無げに教室を見回す紀美子。幾多の生徒が通過していったであろう、疵だらけの机——壁のしみ——。(適宜カットバック)

グラウンド

渾身の力を振り絞って走り続ける美保。

昌美「(時計を見て)それじゃラスト! ダッシュユウ本!」
ガツクリする美保

講堂教室

紀美子が聞いている音楽がオンで聞こえる。
合わせて小声で歌う、紀美子の形の良い唇と、呼び掛ける声。

女の子の声「(オフノ囁く)もっとこっち……」

紀美子「えっ!!」

耳から外しながら発した紀美子の声、異様に大きく講堂内に響き渡る。
振り向くが、誰もいない。
怪訝そうに見回す紀美子。
ふと、手にしたイヤフォンを見る。小さくシャリシャリと鳴っている。

紀美子「『何で聞こえたんだろっ……』(見回す)」
落ちかかっている西日が、血の様に赤く堂内を染める。
S「闇より囁くもの」

校門前

門銘「私立桜麗女子学院高等学校」

制服に着替えた美保と紀美子が連れ立って出てくる。

柔らかな関西イントネーションの会話。

美保「かなんな。早く雪降ってくれへんと、ずっと陸トレや。こない走ってばつかしてたら、足、太なってしまう」

紀美子「（陰りある微笑）」

美保「（紀美子の顔を覗き）どうしたん？ 未だ気になる？」

紀美子「なことはないけど……」

紀美子、手にしていたヘッドフォン・ステレオを見て

紀美子「あんな声、テープに入ってる訳ないし……」

美保「（悪戯笑み浮かべ）そりゃ、あれやわ。講堂の首吊りっ子の霊 ちゃうのん」

紀美子「えーっ、なんやのんそれ」

美保「コーチの井上先輩がね、合宿ん時かなんかに教えてくれたんよ。十年位前、あそこで生徒が首吊ったんやて」

紀美子「（苦笑）またあ！」

紀美子、美保を突き飛ばす。

ケラケラ笑いながら美保

美保「えーっ、これマジよ！」

紀美子「もうヤメ言つてんのに！」

甘味店

薄暗い店内。朽ちつつある店内に客は疎ら。

入ってくる紀美子ら。

奥からオバちゃんの声。

声「（オフ）いらっしやい」

勝手知ったる様子で奥の席に座る二人。

美保「（嬉しそうに）うー、体が甘いもん求めとる」

紀美子「ええなあ。あたしなんか全然体力消耗してへんのにあんみつ食べるんやから」

美保「（苦笑）別に無理して食べへんでもええやん。——（真面目に）紀美子もコーラス部、やめへんでも良かったのに」

紀美子「みんなで歌うの、嫌いやし……」

と、オバちゃんが湯呑を持って来て、テーブルに置く
トン、トン——トン。

紀美子「？」

オバちゃん「あれ？ もう一人どこ行ってん？」

美保「何言うてんのん。あたしら二人で来てるんよ」

オバちゃん「そらおかしいわ。ちゃんと桜麗の制服着た子、三人入
ってくるの見たんやさかい……」

ソツとする紀美子。

その様子を察知した美保、ワザと強く

美保「オバちゃん、歳で目え悪くなってんのとちゃうの？」

あんみつ二つ！ 判った？」

オバちゃん「はいはい」

小首を傾げながら下がるオバちゃん。

美保、やや心配そうに美保を見つめる。

甘味店（数十分後）

店の奥。古いカセットから小さく演歌のカラオケが流
れており、オバちゃん、歌詞カード片手に小声でこぶ
しを回している。

空になった、美保のあんみつの器。

沈んだ顔の紀美子は、半分残している。

紀美子「さつき言つてた、霊の話なんやけど……」

美保「あんなん嘘に決まつてる。やめな、あんまり考えんの。あ

ー、この店も何かケチついた感じ。もう来るのよそつかな
紀美子「だって、制服着たまま入れる店って、ここくらいやし……」

美保、ふと紀美子の手元に見入る。

テーブルの端近くで、両手を組んでいるのだが、何か
妙である。

紀美子「（虚空を見つめながら）美保と一緒にいられるのって、こ
んなとこしかないでしょ？ だから……」

紀美子の手を凝視している美保、ハツとなる。

両手を組んでいるのではない。左手が二つ、重ねられているのだ！

美保「（目を逸らさず）紀美子？」

紀美子「何？」

美保「右手、見せて」

紀美子、体の脇からテーブルの上に右手を載せる。

美保「（驚愕）」

紀美子「どうしたの？」

紀美子の左手を見つめる美保。

既にもう一つの左手は消えている。

慄然と見ている美保、思わず紀美子の右手を握る。

美保「？」

紀美子のマンション／玄関／夜

鍵を開けて入ってくる紀美子。

明かりを点け、そのままキッチンに進み、夕刊をテーブルの上に放る。

5

同／紀美子の部屋前

入るべくノブに手を掛けると――

紀美子「ん」

中から低く、女の声が漏れ聞こえる。何を言っているかは判然としない。

紀美子「ママ？（である事を信じたい）」

意を決して開ける！

紀美子「！」

中は真暗で静寂。電気を点けても、誰もいない。

紀美子、安堵の吐息を洩らして中へ。

鞆を机脇に置き、ふと壁を見る。

掛けられた時計が「7時」を指している。

紀美子「『あ』」

時計の横に貼られているヘップバーンのポスター「

噂の二人』の頃の)、画鋏が一つ外れて捲れている。
『あれ?』

と! ポスター、スルスルと勝手に直されていく。
紀美子、凝視し後ずさる。

何事も無い様に微笑しているヘップバーン。

同ノキッチンノ3時間後

仕事(レストラン経営)から帰ってきている母・尚美。
外出着のまま、お盆にケーキヤコーヒーをセットし、
運んでいく。

紀美子の部屋

ノックする音。

制服姿のまま座り込んでいた紀美子、ハツとなり

紀美子「はい?」

ドアを開けて入ってきた尚美、怪訝そうな顔。

紀美子「あ、おかえり」

尚美「美保ちゃん、来てたんちがうの?」

紀美子「何で? そんなん来てへんけど」

尚美「だって——ずっと話してたやんか? 向こうまで聞こえ

たんやさかい」

紀美子「あたし誰とも話してなんかない!」

尚美「じゃあ、何してたん?」

紀美子、ハツとなって時計を見る。

「10時」

泣きそうな顔の紀美子。

紀美子「あたし何してたん!」

桜麗女子高ノ廊下ノ翌午前

歩いている美保と紀美子。

紀美子「——変な事、多過ぎるよ」

美保「——気のせい、てゆうたげたいねんけど……。確か
に変やわ」

紀美子、立ち止まり、ハッと振り向く。

誰もいない。

紀美子「(脅え)あたし——誰かを連れて来てしもたん？」

美保「誰かて……」

紀美子「——(美保を見つめる)」

当惑している美保、ある事を思いたつ。

スキー部室／同日午後

紀美子と美保 コーチの昌美に会っている。

昌美「(苦笑)えーっ、講堂の首吊りっ子？」

真剣に聞いている様子の二人を見て、当惑。

昌美「あれは——ただのウワサやわ。あたしらの三代上の先輩
たちが言つてはった話よ」

美保「——どんな子が死んだんですか？」

昌美「聞いてどうすんの？」

美保「——」

昌美「(思い出す)確か——何とか里佳いう人やったと思うわ」

紀美子+昌美「——」

図書室／放課後

本の壁が林立する谷間で、卒業アルバムをめくつてい
る紀美子と美保。他に生徒はいない。

紀美子「あつた……」

美保「えっ」

美保、紀美子が開いている頁を覗き込む。

それは卒業の集合写真。紀美子が指差している部分、
「溝口里佳」という名前がポツリと離れたところに書
かれており、しかもその顔写真は人型に切り取られて
いる！

紀美子「(戦慄)——何で……」

暗然と見つめていた美保、ふと下部へ目をずらす。
集合写真の真ん中、若い男の教師が写っている。

美保「担任、牧野やったんやな……」

職員室

美保らの方へ振り向いた牧野、十年前の写真よりも確
実に精気を失っている。

美保「（標準語）ちょっとお聞きしたい事ありまして」

牧野「何？」

美保「あの——（躊躇い）——」

牧野「（微笑）何ね？（邪推）」

美保「十年くらい前の、先生のクラスの子が——講堂で——」

牧野「！」

美保「首吊って死んだって話——本当ですか？」

牧野、背を向けて集計用紙に向かう。

牧野「——」

美保、困った顔を紀美子に向ける。

牧野「——そんなウワサ話、まだしよる奴おんねんな」

紀美子「——先生？——あの、溝口里佳って生徒——」

牧野「（押しつぶした声）そんなんウソや……。あいつは病気で
死んだんや！首なんか吊ってへんがな！」

最早牧野は、語る気が無さそう。

それを察知した二人、暗然となる。

講堂教室

紀美子と美保だけが、夕陽の差す教室にいる。

小声でアリアを歌っている紀美子。

美保「（座っている）あんなんウソに決まってる！牧野のあの
態度、絶対おかしいわ！」

相変わらず歌っている紀美子。

その横顔を見つめる美保……。

と、おもむろに紀美子、

紀美子「ね、ちよつと、あたしの首、締めてみてくれへん？」

美保「（啞然）え？」

紀美子「本気じゃなくて。ちよつと、軽く」

美保「（やや怒声）やめときて！ そんなアホなこと」

紀美子「おねがい」

逡巡するも、美保、紀美子の側へ寄り、首に手を差し伸ばす。

何かの予感を感じる様に、美保の目を見つめる紀美子。美保の指先が、紀美子の白く細い喉に触れる。

その冷たさに、一瞬反応する紀美子。

美保のしなやかな指が、紀美子の喉にからみつく。決して力を入れない。

二人の少女が見つめあっている。

紀美子「——冷たい……、美保の手」

美保「（目を丸くして）わ、喋ると喉が震えるー」

紀美子の首の手触りを感じていた美保、

美保「（手を放して）あほくさ！ さ、帰るー！」

自分の首に触れ、美保の掌の残った感触を感じている。紀美子。やや混乱している。

紀美子の部屋／深夜

風呂から上がってきた紀美子、髪をタオルで拭いつつ、電話をしている。相手は美保。

紀美子「——（軽い口調）うん平気……。ただ、髪洗う時な、ちよつと怖い気がした。え？ だって髪洗ってる時って、目も開けられないし、裸だし（笑う）——え？ 同窓会名簿？ へえ。よく手に入ってるな。何や探偵みたい。どないすんのん？——（顔曇る）そう……。でも、そんなまで調べても——。そりゃそうねんけど……。うん判った。じゃ、明日。お休み」

電話を切り、再び髪を拭うのに没頭する紀美子。

ふと、机の上に置かれたヘッドフォン・ステレオを見る。暫し逡巡するも、手を延ばし、蓋を開けてテープ

を取り出す。曲名がラベルに書かれている。
紀美子、テープを巨大なラジカセに挿入して、プレイ
無音——。

不審気にヴォリュームを上げ、スピーカーに耳を寄せ
る。カタカタと、小さな音をたてて回るテープ。

紀美子「？」

スピーカーから、ホワイト・ノイズに混じって何かが
聞こえ始める。女の声」

紀美子、顔を歪める。

その声——それは講堂で歌っている紀美子の小声
の歌である。

紀美子「——あたし？——何で……」

と！ 違う声が重なってくる。

囁く声「——もっとこっち……」

紀美子、泣きそうな顔。

囁く声「——もっとこっちまで聞こえる様に……」

声、ラジオ・トーンの上に囁き声の為、切れ切れに聞
こえる。

囁く声「——こっちからはね——あなたの顔が見えない——」

声だけが聞こえるの——」

バチッ！ それ以上聞くのが恐ろしくなった紀美子、
ラジカセを切り、部屋の隅へ後ずさつて座る。
両肩を自ら抱く様に抱えてうずくまる紀美子。

教室／翌午前

美保、紀美子のヘッドフォンを耳に入れ、スイッチを
入れる。鳴り出すジャカジャカ音。

「う」となって、耳から外す紀美子。

紀美子「？」

美保、無言で『そんなもん、聞こえないよ』

紀美子、イヤホンを奪い、自らの耳に入れてプレイ。

過日、講堂で聴いていた曲。

紀美子「違うニ——あたしの聞いたのはこれじゃないニ——」

ギョツとなつて二人を見る他の女生徒たち。

美保「(慌てて小声で) やっぱ、ちゃんと調べた方がいい」

紀美子「——」

グランド

鞆を持って歩く二人。

と、向こうからクラブの仲間が美保を呼ぶ。

生徒A「みほーっ！」

美保「あつ！ あたしな！ 今日スキー部出えへんから！ コー

チにそう言つたつて！」

生徒A「えーっ」 土曜の練習サボるつもりなん」 知らんで！

つたく、自分で言うてよそんなん」

ブツブツ言いながら走つていく生徒。

紀美子「(目を上げ) —— 無理にサボらなくても……」

美保「(紀美子の肩にポンと手を載せ) 親友のトラブルはあたしのトラブル」

紀美子「(クスッ) そんな名言、聞いたことないわ」

ブティック店内

千尋「ひゃあ！ 桜麗の制服やないの！ 懐かしわあ」

やや濃いめの化粧をした店主が二人を見て発した言葉。

しげしげと二人の服に見入り

千尋「あたしらん時よりも、スカートの方、短くなつたんちがう？」

けど、やっぱりええわねえ。桜麗の制服、だいたいあたし、

この制服着たくて桜麗入つたんやから」

美保「(困つた顔) ああ——」

千尋「何？」

紀美子「溝口里佳つていう人と、同じクラスでしたよね？」

サツと顔が曇る千尋。

千尋「—— そうですけど」

美保「やっぱり—— 講堂で首吊つたつて本当でしょうか」

千尋、困惑した顔で所在無げにハンガーに掛かつた服

を直し始める。

千尋「——そんなウワサ、あったけれど……。あの人、ずっと学校休んどったし——殆ど話さへんかったから、よう知らんのよ。あの子死んだんも、確か春休みかなんかで……」

紀美子「（思案）——どんな人だったんですか？」

千尋「そうやなあ……。なんか特徴みたいなもん、あったかな。何となく、覚えとるんは——色が浅黒かった様な気がするぐらい。目立たなかつたしねえ……」

紀美子「——」

団地のドア前

主婦・洋子が顔を覗かせている。奥から子供の声。

洋子「（追想）——そう言えば、いたかしらね……。あ、佐々木愛ちゃんが仲良くしてた子だったかしら？……」

美保「あの、色が浅黒い感じの人って聞いてますけど」

洋子「えっ？ 溝口さんが？ それ、違う人の事や思うわ。確かにあの人は背え高くて、変に痩せてた子や思うわ」
顔を見合わせてる二人。

デザイン事務所

グラフィック・デザインの事務所。マックのモニターが、イラスト作成ソフトの画面を表示している。デザインターの時子がマウスを動かしながら

時子「——確かに首吊ったという話は、卒業してから聞いてんけどな。溝口里佳やったかどうか……」

背後に並んで座っている二人。膝には卒業アルバムを広げている。

美保「背が高かったそうですね」

時子「え？ 違う違う。あの子は確か、小さかったと思うわ。顔が白ーい感じで……」

紀美子、何故か悪寒を走らせる。

時子「せや、あの人に一番親しかった子がいたなあ……」

時子、振り向き、アルバムに見入る。

美保「確か——佐々木さんとか……」

時子「そうそうそう。（見探す）あ、この子この子……」

時子が指で指したのは——おとなしそうな、やや紀美子に感じの似た少女。

時子「（ふと眉をひそめ）あ、そう言えばあの二人で……」

美保「なんですか？」

時子「（取り繕う）ううん、何でもあらへん……」
じっと時子を見つめている紀美子。

小公園ノ夕刻

ビル街の中にある小さな公園。

二人、ベンチで暖かい缶コーヒードで暖をとっている。

美保「——あたしたちも、十年経ったら、あんなになるんかな……」

紀美子「——」

美保「だいたい信じられへん。たった十年で、クラス顔まで忘れるなんて——あたしそういうの、嫌やわ」

紀美子「——忘れられてしまうという事は、存在自体が無かった事と一緒にちがうかな……」

美保「——かもしらへんな……。皆言う事バラバラやし、写真もない……。だから！——だから、あたしたちがはっ

きりと——」

紀美子「もうやめよ！」

美保「え？」

紀美子「このまま無かった事にするのよ！あたしがきつと気にし過ぎてたんや思う！知らん方がいい事だつてある」

美保「そんな絶対駄目よ！（紀美子の掌を握り）何でここまで来て諦めんのか。おかしい事起こつてんのは事実なんやからね！」

紀美子「——美保って、あたしの何？」

美保「さ——何って……」

美保、思わず紀美子から手を離す。

紀美子「あたしの事なんよ！ どうしてあたしの好きにさしてくれへんの？」

紀美子、立ち上がって向こうへ走り出す。

美保「紀美子！」

唇を噛んで見送る美保。

手にしているクシヤクシヤな、同窓会名簿の「ページ」。

それを広げて見探す。

「佐々木愛」

見つめていた美保、意を固めて立ち上がる。

紀美子のマンション／紀美子の部屋前

尚美「ただいまー？」

帰ってきたばかりの尚美、近づく。ドアの内側から「ソゴソ」と話し合っている声。
訝しそくに聞き耳をたてる尚美。

佐々木家前

住宅街の普通の家。「佐々木」という表札を見て、ベルを押そうとすると——ドアが開く。

美保「！」

出てきたのは——あの写真の少女。まるで十年間歳をとらなかつたかの様な姿。

美保「（オフ）うそ！……全然変わってない！」

出てきた少女、立ち尽くす美保を怪訝そうに見返す。

紀美子の部屋前

時折笑い声までが低く聞こえてくる。

心配そうな顔で聞いてた尚美、堪らずドアを開けようとするが——鍵が掛けられている！

尚美「紀美子！ 紀美子！」

と、ドアが開き、紀美子が顔を出す。アルカイックな

憑かれた様な笑みを浮かべて。

紀美子「——」

尚美「(安堵)——中に、誰かいるの?」

紀美子「今、ともだち来てるから」

尚美「あ、美保ちゃん?」

尚美、覗こうとする。

薄暗い部屋に、少女の背中が見え——

閉じられるドア。

紀美子「(オフ)今、着替えてるから」

無理に納得しようとする尚美。

佐々木家内/応接室

座っている美保。その視線の先には——

サイドボードに飾られている佐々木愛の写真。

萌「(オフ)おねえちゃんとあたし、顔は似てるみたいなん」

振り向く美保。

萌がジュースを持って来ていた。萌は、顔は愛と似ているが、服装も感じも活発そう。

美保「それで——お姉さんは今——?」

萌「——知らんで来たん?——死んだんよ」

美保「三三(腰を浮かす)」

萌「桜麗行つてはるん?うちも受けてんけど落ちてしもたわ」

美保「死んだって——いつ?」

萌「卒業した年の春よ。講堂で首吊つてもてん……」

美保「——」

愛の部屋

暗い室内に電気が灯る。

まだそのままに残されている愛の部屋。

萌「普段使てへんから、黴臭いかもしれん」

見回す美保。

整然とした女の子の部屋。

古いラジカセが机の上に。

萌 「おねえちゃん、コーラス部おつてな。その頃の歌が入ってるねん」

美保「——」

萌 「親とかたまたまに部屋入ってそのテープ、聞くんやけど……。うち、堪らん様になる……」

美保、ふと机の奥に貼られた写真を見る。

古い写真。愛が写っている。その横に、同じ背格好の人物が写っていた筈だが、切り取られていた。

美保「これ……」

紀美子のマンション内／浴室・脱衣場

風呂から上がり、頭にタオルを巻いている尚美。と、向こうから紀美子の声が。

紀美子「（オフ）おかあさん！ ちょっと学校行ってくる」

尚美「こんな時間？ なんで？」

紀美子「（オフ）友達が忘れものしてん」

尚美「ちょ！ 紀美子？」（慌てて着繕いしようとする）「

鉄の扉が閉まる音。

愛の部屋

人間が切り取られた写真。愛が微笑んでいる。

美保「——」（顔を歪めて呟く）どこ行っても里佳さんの、顔が無い……」

怪訝そうに美保を見る萌。

木陰／回想

座ってお弁当を食べている愛。その隣にいるものの顔は見えない。

萌 「（オフ）里佳さんで、ずっと病气して休んどつたから、ちよっとハブみたいになってたんやて。お姉ちゃん、優しいか

つたから、友達になっただけでん。けど——御陰で変な噂
たつてもうて……」

愛の部屋

美保「(諒解) 友達以上——けど、何でこんな(酷い)……」
萌「それが——(言い淀む)——おねえちゃん、里佳さん
が亡くなつてから、ちょっとおかしくなつてしまつてな、変
な事口走つてみたい」

美保「——どんな？」

萌「——『里佳さんが呼んでる』、言つて」

美保「(衝撃)」

萌「『あたしの声が欲しい』言つてるて」

ハツとなる美保、ラジカセに手を延ばし、スイッチを
入れる。

アリアをソロで歌う少女の声の流れ始める。その
歌声は特徴ある紀美子とそっくり！

美保「(呟く)紀美子……!!」

萌「(怪訝そうに)どないしたん?」

桜麗女子校門前

校門を入つていく紀美子。

その前方には、女の子が手招きしている。その姿は陰
になつて見えない。

紀美子のマンションリビング

電話が鳴り、取る尚美。

尚美「もしもし?——ああ、美保ちゃん? えっ……さっき
うちに來てたの、美保ちゃん違つ?——」

住宅街/電話ボックス

美保「(必死に)で、どこ行った言うてました——学校？
——(ああ、と目を閉じる)——はい——はい、
すみません——」

受話器を置く。
祈る様な姿で暫しいたが——
バン！ ドアを開けて夜の街へ走り出す美保！

夜の街

走る美保。運動選手らしい走り。
祈りながら、必死に走り続ける。

桜麗女子校門前

走り込んでくる美保。

講堂教室前

息を切らしながら、やっと着いた美保、ドアを開けよ
うとするも開かない。

と！ 中から紀美子の歌う声が聞こえ始める。
美保「紀美子ーッ！ 紀美子、あたしニここ開けてニ」
声、いつこうに止む気配がしない。

美保、不屈の顔を浮かべ、その場から離れる。

同ノ裏手

周り込んできた美保。
古い扉を見つけ、力任せに引っ張ると——開いた！
中へ入っていく。

同ノ内ノ狭い通路

よりはっきりと聞こえてくる紀美子の歌。しかし壁—

枚向こうへはどうしても行けない！

美保「紀美子ーっ！」

ハッとなって見上げると、照明調節室への連なる階段が。美保、駆け上がっていく。

同／調整室

照明や音響の調整卓が設えられた部屋。

駆け込んでくる美保。嵌め殺し窓から下を見る。

講堂内

舞台の脇に立つ紀美子、その上からはロープが垂れている。

調整室

美保「紀美子ーっ！」

講堂内

窓の内側の美保の叫び、中には聞こえない。紀美子の脇に、淡く光っている人影。里佳こ

調整室

『どうしよう』と口を抑える美保——！

美保、鞆の中身をブチまけ、カセットを取り出して、調節卓にあるデッキに挿入。

マスターヴォリューム、最大！

プレイ、スタート！

講堂教室内

突如響く、愛の声。アリアを歌っている。
硬直する紀美子。

淡い人影の光、その強さを増す。

と！ マイクを通じた美保の声が響く。

美保「（オフ）里佳さんニ、そこにいるのは佐々木愛さんと違うんよニ、もうあなたは、佐々木愛さんを連れてったんでしよニ？」

調整室内

マイクに向かって叫ぶ美保

美保「紀美子は——あたしの紀美子なんだからッニ」

と！ 淡い光が消え、紀美子とその場に崩れる。

美保「紀美子ニ」

慌てて下へ降りていく美保

講堂内

バン！ 開いた扉から駆け出しってくる美保。

倒れている紀美子。

美保「紀美子！」

駆け寄り、抱き抱える。

紀美子「——（目を開け）——美保？……」

美保「『良かった……』」

暫しそのままにいる二人——。

教室ノ夕刻（エピローグ）

鉦石ラジオを耳にしていた教師——

教師「紀美子と美保は、卒業後、離れ離れになつたそうです。あんまり、電話もしとらんいう話です……。学校時代の友達をずっと大事にするいうんは——意外にむつかしいもんみたいですね……」

教師、ラジオを片づけ始める……。

終